

『とはずがたり』の旅——呪縛からの解放——

今 関 敏 子

キーワード 制度・家・女・小町の末路

要 約

一、はじめに

鎌倉時代に大旅行をした女性として共通する阿仏と後深草院二条は、制度の中と外という観点でみるならば、まったく対極的な存在である。阿仏は家に帰属する女として、家のために生き、制度に守られ、また制度を強固に支えた。しかし、二条は家に帰属しては生きられなかった。この意味で二条は独身者・単身者であった。阿仏は和歌の家を守るために大旅行に挑んだが、一方、二条の旅は制度から逸脱した女の旅であった。しかし、彼女は、結果的に尼として大規模な旅を実現させている。それは、歌枕探訪、都回帰という制度的な旅の類型と表現を超えた冒険的で個性的な新しい旅と言える。そしてそれは、家なき女の身の果てに待ち受けていた小町の末路からの解放であり、人生の達成でもあった。

鎌倉時代に大旅行を実現させた女性としてまず頭に浮かぶのは、阿仏であろう。『十六夜日記』に書かれるのは、京から鎌倉までの、訴訟に勝つための目的ある旅である。旅を素材とした阿仏の作品にはもう一つ、『うたたね』がある。こちらは、若い頃の精神の彷徨がテーマの、一人称の青春物語ともいえるべきものであり、とりわけ虚構性が強い。さて、もうひとり、阿仏よりさらに広範囲な大旅行をした女性に後深草院二条がいる。その作品『とはずがたり』の発見は、昭和の人々に大きな衝撃を与えた。巻一〜三には、宮廷の男女関係の様相がそれまでの作品にはない筆致で綴られ、巻四・五には、多彩な旅が繰り広げられているのである。

阿仏と二条——女性の行動半径の広さという点では、共通する二人であるが、制度の中と外という観点でみるならば、実に対極的な存在である。

阿仏は、夫亡き後も家に帰属する女として生きた。亡夫に代わって和歌の家を継ぐ子どもの成育に力を注いだ。鎌倉下向も、家のためなればこそその旅であった。家に基盤を置いて、母として家の後継者たる子を育てるのは、最も安定した制度的な中世の女の生き方であった。家に帰属し家を支える阿仏のような女性の存在は、制度を強固に支えたであろう。

一方の二条は、家に帰属しては生きられなかった。後見のない身で宮廷を追われた二条は、帰属する場のないマイノリティであり、制度から逸脱した存在であった。家を離れ、家族を持たぬ単身者、独身者として、先達なき道を開拓しなければならなかった。

いかなる時代の共同体、社会にも制度がある。制度は人を守る。一方、人を縛る。制度の中に安住出来る存在にはかえって、制度の構造、矛盾、欠陥は見えにくい。あまりに当然過ぎることには人は疑問をもたないのである。この意味で、人間は、制度に無自覚に絡めとられてしまう面がある。そして、制度は逸脱した者を排除していく。小町零落伝承は、制度からの排除の構造の中で時間をかけて醸成されたのである。<sup>②</sup>

阿仏の生き方は、小町的なものとは、無縁であった。波乱万丈ではあったろうが、阿仏は家に帰属する女として制度に守られて生きた。しかし、二条にとっては、伝承の小町の最期は、我が身に起こり得る現実であった。制度を逸脱した生

き方はいつの時代にも苛酷であるが、鎌倉期の家を離れた女にとって流浪と野垂れ死は最も恐れられた最期であった。

『九相詩絵巻』も小町壮衰譚も説得性を持って流布したのである。また、阿仏作と考えられる『乳母のふみ』に、「あらぬ所をゆかしうする心は、落ち下る因縁にて候ふ。」<sup>③</sup>（知らない場所に行きたいなどと思うのは、墮落するものとすよ）と流浪に向かう事を戒めている箇所があるのは、注目されよう。女が零落する要因は拠点を失うことであると明確に認識されている。拠点を失えば、零落し、流浪が待っている。これは当時の女の現実であり、共通認識であったと思われる。

## 二、旅立ちまで

### I 制度と逸脱

『とはすがたり』は二条十四歳の春から筆が起こされる。これは、制度という観点からは、きわめて効果的な、作者にとっては必然的な選択である。何故なら、この年をもって、二条の人生は方向付けられてしまったからである。二条は、後深草院の寵を受ける身となった。承諾したのは、父、大納言源雅忠であった。上皇の絶対権力には、誰も抗えない。寵を得たことを境に、幼少より慣れ親しんだ宮廷という場の意味が変っていく。

十四歳の二条には、雪の曙（西園寺実兼）という恋人がいた。恋とはそもそも個の自発性の強いものである。常識、立場、身分や年齢の釣り合いという制度的な規範よりも、男女の惹かれあうエネルギーの方が強い。上皇の権力には屈服するほかはなかったが、雪の曙は二条を諦めはしなかった。父亡き後、密やかな関係が始まる。危険な制度外の恋に二条は身を委ねることになった。後には、上皇の弟である高僧、有明の月（性助法親王）に思いを打ち明けられ、新たな秘密を持つ身となる。これを知った上皇は、意外にも二人の仲を容認し保護した。一見寛容に見えるこの処遇は帝王の気まぐれであり、実は、二条と有明の月の関係を、絶対権力を持って支配しているのである。これは二条にとっては決して心地よいものではなく、かえって辛いものであったろう。制度外の恋は苦しくとも秘密を保ち続けなければ自由ではない。実は、雪の曙と二条の間柄にも上皇は気づいており、間接的に妨害している。上皇を頂点とする政治と性の駆け引きの世界には、龜山院、近衛大殿も関わってくる。二条は宮廷という場で、性愛の対象として錯綜した男女関係に翻弄される身となった。

上皇自身、二条と男たちの反心を見ながら、事の成り行きを楽しんでもいた節がある。そうである限り、乱脈にみえても宮廷の男女関係の均衡は保たれていたのである。上皇を頂

点とした制度の中に二条は存在することが出来たのである。しかし、そのような状態は長くは続かない。雪の曙が後退し、有明の月が他界して後の上皇は、色褪せた男女の構図にも二条自身にも興味を失っていく非情な権力者でしかない。二条は理由も告げられずに追放される。

制度からの逸脱である。既に父はなく、帰属する場は失われた。人生は破滅の方向性を帯びていく。小町の系譜に連なるへ色好みへの果ての流浪と零落が想定される。

もし、雪の曙を夫として、その子どもの母として生きることができたなら、人生は全く異なる展開を見せたであろう。また、もし、生涯を通じて上皇の寵を受ける身として母としても生きられたなら、二条の人生は安定したものであったろう。しかし、結果として、どちらの人生も二条には無縁であった。制度的な安定とは対極的な、帰属する家のない単身者、独身者として、先達のない独自の道を、二条は歩まねばならなかった。その発端が、まさしく十四歳の春だったのである。

## Ⅱ 父の遺誠―旅への伏線

皇子を身籠った十五歳の二条を残して、父雅忠は他界した。後見を失う娘に、死の床で雅忠は、次のように言い置く。

君に仕へ、世に恨みなくは、慎みて怠る事なかるべし。

思ふによらぬ世のならひ、もし君にも世にも恨みもあり、世に住む力なくは、急ぎてまことの道に入りて、わが後生をも助かり、二つの親の恩をも送り、一つ蓮の縁と祈るべし。世に捨てられ頼りなしとて、また異君にも仕へ、もしは、いかなる人の家にも立ち寄りて、世に住むわざをせば、亡き後なりとも不孝の身と思ふべし。夫妻のことにおきては、この世のみならぬ事なれば、力なし。それも、髪をつけて好色の家に名を残しなどせんことは、返す返す憂かるべし。ただ世を捨てて後は、いかなるわざも苦しからぬ事なり。

(四〇頁)

寵が変らなければ問題はないが、思うに任せぬ世の中である、寵愛を失った場合には出家をするようにと父は娘に説く。

行き場を無くした女が別の主人や家を見つけようとしても、男たちの都合のよいように処遇され、墮落し、女として不名誉なことになる。在俗のまま流離うことを父は厳しく戒めるのである。――出家の身で風流に生きるならそれはそれで構わぬ。多少のことがあろうと、出家しているだけで荷が軽くなるものだ。むしろその方が望ましい、と。

父の遺誡の背景には、家を離れた女性の身の果てが悲惨であった当時の状況がある。女が出家することは、性愛の対象から降りたことの表明であり、一人身の女が身を守る方法で

あったと思われる。父の死より十五年ほど後、御所を追われた二条は父の遺誡通りに出家をしたのであった。

### Ⅲ 「こころみ」の旅

ところで、流浪性を帯びた『うたたね』（阿仏作）の主人公の出走は、実は離れかけている男の愛情を試そうとする「こころみ」の行為であったと思われる<sup>⑤</sup>。場所の移動という意味で、「こころみ」もひとつの旅のあり方と言えは言えるであろう。『源氏物語』帚木には、姿を消し、そのまま尼になつてしまふ女が、男性の登場人物から批判的に語られているが、王朝の女たちが、このような「こころみ」の行動に出るのは、そう特殊なことではなかったようである。『うたたね』の「こころみ」は失敗に終わったが、二条もやはり、相手の心を試すために姿を消したことがある。

『源氏物語』の一場面を模した女楽の遊びが宮中で催されたことがあった。その際、琵琶の心得のある二条には、明石の上の役があてがわれた。祖父隆親の娘の新参者が女三宮である。二条には、格の低い役が納得出来ない。

(上略) 人よりことに落ちばなる明石になる事は。

(一一七頁)

二条は席順に激しく反発し、幼いころより嗜んでいた琵琶を捨て、身を隠した。

参らせ置く消息に、白き薄様に琵琶の一の緒を二つに切りて包みて、

数ならぬ憂き身を知れば四つの緒も

この世の外に思ひ切りつつ

と書き置きて、「御尋ねあらば、都へ出で侍りぬと申せ」と申し置きて、出で侍りぬ。(二二九頁)

雪の曙は、参籠して夢託を得、ついに二条を捜し当て、次のように言っている。

心強くも隠れ給へども、神の御しるべは、かくこそ尋ね参りたれ。(一三七頁)

きつぱりと意志を通してあなたは身を隠されたけれども、神の啓示によりこうして尋ねて参りましたよ——「色好み」の女に対する、何とも心憎い「色好み」の男の殺し文句である。曙と二条はまさしく《行動する男》と《拒む女》の好一对である。「心強し」は、「心弱し」に對立する、「色好み」の女の心意気を表す表現であり、自己の意志で選択し、毅然と拒める状態をいう。<sup>⑤</sup>

二条の出奔騒動は院の迎えによって幕を閉じるが、意志を貫くことの出来なかつた不本意な心情を次のように述べている。

(上略) 例の心弱さは、御車に参りぬ。(二四二頁)

仕方がない、戻りましょう、というところであろう。女樂

の席順は、二条のプライドをいたく傷つけた。この一件は、後見のない二条の立場の弱さを物語っている。それでも、もし、出奔したまま探し当てられることなく終ってしまったら、どうなっていたであろうか。

二人の男に捜し求められ迎えられる結末は、女性として満足ではないはずである。二条の「こころみ」は成功している。

「こころみ」にはあてどない流浪の要素があるようにみえるが、その前提は、むしろ流浪とは対極的な、定住の場であった。帰る場があつてこそ、居場所を変えて相手の反応をみることが可能なのである。この時二条、二十歳。宮中における「色好み」の構図の均衡は未だ揺らいでいない。

宮廷という場にあつてこそ、危ういバランスの上で男たちを魅了する二条の「色好み」たる生き方は体現されたのであつた。しかし、同じ状況は長くは続かない。父の案じた通り、寵愛は薄れ、二条は宮廷を追われた。

### 三、都の意味

#### I 類型表現

二十六歳で御所を出てからの二条が、いかなる経過を辿つたのかは作品に書かれてはいない。第四巻は、三十二歳の二

条が旅立つところから始まる。

『伊勢物語』東下りの昔男と二条には、拠点の喪失と流浪の方向性という共通点がある。都に住み詫び、「身をえうなきもの」として東の方に拠点を求めてさまよう昔男の流離。上皇の権力下にあり、ある時期は受容されながら、ある日突然に理由も告げられず御所退出を命じられた二条の旅。零落の果ての流浪は、両者の共通項である。ただし、旅の主体が書いた『とはすがたり』の表現は『伊勢物語』ほど、流浪性は顕著ではない。後編の冒頭をみよう。

子 敏 関 今

二月の二十日余りの月と共に都を出で待れば、何となく捨て果てにし住みかながらも、またと思ふべき世のならひかはと思ふより、袖の涙も今さら、宿る月さへ濡るる顔にやとまでおぼゆるに、われながら心弱くおぼえつつ、逢坂の関と聞けば、「宮も藁屋も果しなく」と詠め過ぐしけん蟬丸の住みかも、跡だにもなく、関の清水に宿るわが面影は、出で立つ足許よりうち始め、ならはぬ旅の装ひとあはれにて、休らはるるに、いと盛りと見ゆる桜のただ一木あるも、これさへ見捨てがたきに、田舎人と見ゆるが、馬の上四、五人、汚げならぬが、またこの花の下に休らふも、同じ心にやとおぼえて、

行く人の心を留むる桜かな

花や関守逢坂の山

など思ひ続けて、鏡の宿といふ所にも着きぬ。

(二二七―二二八頁)

「捨て果にし住みか」には喪失された場という思いが籠められていようが、都を否定しているわけではない。傍線部は、いつ帰ることが出来るかわからぬ都に思いを残しつつ旅立つ、という表現類型の踏襲<sup>⑤</sup>がみられ、続く逢坂関からは、歌枕（部）が辿られる。これは紀行の類型である。二条の特殊な状況が殊更強調されることはない。

当時、中心である都と周縁である地方は、全く文化的位相の異なる場であった。当時の文化の中心、すべての規範であった都は、既に現実の拠点たり得なくとも、二条の精神的背景である。地方の珍しさに接しても、二条の精神基盤が揺らぐことはない。むしろ都の優位さが再確認される。鎌倉到着を例に挙げよう。

明くれば鎌倉へ入るに、極楽寺といふ寺へ参りて見れば、僧の振舞都に違はず、なつかしくおぼえて見つつ、化粧坂といふ山を越えて、鎌倉の方を見れば、東山にて京を見るには引き違へて、階などのやうに重々に、袋の中に入れたるやうに住まひたる。あな物わびしとやうやう見えて、心とどまりぬべき心地もせず。(二三四頁)

都に共通することがあれば懐かしく、あまりに違っていると疎ましい。あくまでも基準は都である。

流浪性を色濃く持ちながら、二条の書く文章には、その悲劇性が直接的には感じられない。それは、都回帰と歌枕訪問という、紀行文の類型を『とはすがたり』もまた踏襲しているからである。

## Ⅱ 後深草院

二条が都にこだわる独自の理由は後深草院である。

鏡山の宿で出会った遊女たちと別れる際に歌が詠まれる。

明け行く鐘の音にすすめられて出で立つも、あはれに悲しきに、

立ち寄りて見るとも知らじ鏡山

心の中に残る面影

(二二八頁)

この面影は後深草院をさす。前編の宮廷生活で様々な葛藤のあった男たちは、後編の旅の記には登場せず（雪の曙が、西園寺実兼という実名で登場する場面はあるが）、思い出の場面にすら現れない。折に触れ、二条が回想するのは、後深草院ただ一人である。

二条の亡き母、大納言典侍は後深草院の新枕の手ほどきをした女性で、院の初恋の人ともいべき存在であった。後に、大納言典侍は源雅忠と結婚、二条が生まれる。その誕生を院は待ちわび、誕生後、特別に目をかけた。二歳で母を失った二条を父は愛情深く育むが、院も二条を慈しんだ。四歳から

御所に入り、院を慕って成長、七歳から始めた琵琶を、九歳では院に帥事した。そして十四歳で寵を受ける。

それから十二年後の御所追放・零落——このような状況に至らしめた張本人、後深草院の心のうちはついに理解出来ないままである。己の真意を伝えられなかった無念さは消えない。院は未生以前から二条を支配し、見捨てた。それは何故なのだろう、後深草院の存在意義とは何か。逃れられぬ運命としてそう生きることを余儀なくされた自己とは何か。この答を捜しつつ二条は旅をしている。院の一方的な追放を承諾出来ない限り、都は、二条がその意味を問い続ける対象である。関わり続ける対象である。

そしてついに運命の人後深草院とは、奇しくも石清水八幡宮で邂逅した。この場面なくして、『とはすがたり』は意味をもたないと言えるほどの、作品のクライマックスである。そこで改めて愛情を確認し、和解できたと言い得る。名残は尽きないが、形見の小袖を頂戴して再び旅の尼に戻る。

重ねしも昔になりぬ恋衣

今は涙に墨染の袖

(二六一頁)

二条四十七歳の年、後深草院崩御。二条は我を忘れ、夢中で柩の車を追う。一介の旅の尼に過ぎぬ二条の心のうちを知る者はいない。いつの間にか履物はなく、裸足であった。修行の旅の途中で親の形見も、院の形見も手離した二条は、

これより後、ますます仏道と歌の道に精進する決意を固める。こうして作品は終るのである。

#### 四、遊女のいる風景

##### I 遊女への共感

旅のはじめに、鏡山の宿では、遊女たちに出会う。伝承の小町も遊女になるが、定住の場をもたず、流浪する存在の典型は遊女である。

暮るる程なれば、遊女ども、契り求めてありくさま、憂かりける世のならひかなとおぼえて、いと悲し。

(二二八頁)

子 敏 関 今

「憂かりける世のならひ」「悲し」は、遊女に対するごく当然な旅人の感想であろう。

しかし、男性の手になる紀行では遊女は旅の風物であつて、案外、その悲惨な面を洞察する姿勢は稀薄である。たとえば、垣間見た遊女の一面が、旅の情趣を添え(『東関紀行』)、大江定基が遊女の導きによって出家したという説話に感心し(『海道記』『東関紀行』)、一夜の契を頼む遊女に哀れさを覚える(『海道記』)という具合である。『信生法師集』は例外的であろう。

小野の宿に泊まりぬるに、君どもの有様の、殊にあはれ

なり。(中略)世の旅人の慣ひ、妃がすぐれたる容、貴種豪賢のいみじき人とても、一度眼を閉ぢて後、これに違ふべからず。獄卒・閻魔の呵責、貴賤なかるべし。

(五頁)<sup>⑩</sup>

信生は遊女たちを憐れみ同情するが、さらに視野を広げ、人間存在そのものの普遍性を説く。身分の上下、美醜、優劣に関わらず、人は一度死して後は、遊女たちと変わりはない、地獄の責め苦はこの世の貴賤とは別のものだ、と。

また、『更級日記』に登場する闇から闇へ消えた箱根山の遊女は、少女の視覚と聴覚が鮮明に捉えた束の間の魅惑の光景であつた。そこには、遊女の現実への眼差し、同情はない。<sup>⑪</sup>

二条の場合、看過できないのは、遊女への共感である。『とはすがたり』に於ける遊女の描写の独自性、眼差しの深さについては、既に指摘されているが、諸国を旅する二条に遊女の姿が影のように添うのを見逃してはならないだろう。

鏡山の次には、赤坂の宿で、遊女との交流がある。

やうやう日数経る程に、美濃国赤坂の宿といふ所に着きぬ。ならばぬ旅の日数もさすが重なれば、苦しくもわびしければ、これに今日ほとどまりぬるに、宿のあるじに、若き遊女姉妹あり。琴・琵琶など弾きて、情あるさまなれば、昔思ひ出でらるる心地して、九献などとらせて遊ばするに、二人ある遊女の姉とおぼしきが、いみじ



く物思ふさまにて、琵琶の撥にてまぎらかせども、涙がちなるも、身のたくひにおぼえて目とどまるに、これもまた、墨染めの色にはあらぬ袖の涙をあやしく思ひけるにや、盃据ゑたる小折敷に書きて差しおこせたる。

思ひ立つ心は何の色ぞとも

富士の煙の末ぞゆかしき

いと思はずに、情ある心地して、

富士の嶺は恋を駿河の山なれば

思ひありとぞ煙立つらん

慣れぬる名残は、これまでも引き捨てがたき心地しながら、さのみあるべきならねば、また立ち出でぬ。

(二二八―二二九頁)

尼と遊女―一見対照的な両者である。しかし、芸能をつかさどる遊女は、二条にとつて、昔の宮中の遊びを思い出させる。姉の遊女は琵琶を手にしている。二条には過去に女樂の席順の一件で琵琶を捨てた経緯があった。

貴顕な身であろうと、賤なる身であろうと、宮廷に在った二条と遊女には驚くほど共通点がある。狭い枠組みの中で、音楽や和歌という「遊び」を媒体に男たちと交流をもつという点は、宮廷女房も遊女も同様である。

姉の遊女は、心のうちを隠しきれず涙にくれている。「もの思ふさま」の物思いとは言うまでもなく恋を暗示している。

二条も、宮廷では男たちとの間に、様々な物思いを尽くしてきた身であった。互いに何も説明しなくとも不覚の涙で「身のたくひ」を知り、初対面にもかかわらず、息の合った和歌の贈答が交されるのである。

## Ⅱ 遊女の変容

さらに二条と遊女の出会いを追っていくと、

かやうの物隔たりたる有様、前には入間川とかや流れたる、向へには岩淵の宿といひて遊女どもの住みかあり。

(二四五頁)

という記事を経て、巻五の始めに次の叙述がある。

何となく賑ははしき宿と見ゆるに、たいが鳥とて離れたる小鳥あり。遊女の世を連れて、庵並べて住まひたる所なり。さしも濁り深く、六つの道にめぐるべき営みのみする家に生れて、衣裳に薰物しては、先づ語らひ深からんことを思ひ、わが黒髪を撫でて、誰が手枕にか乱れんと思ひ、暮るれば契りを待ち、明くれば名残を慕ひなどしてこそ過ぎ来しに、思ひ捨てて籠りゐたるもありがたくおぼえて、「勤めには何事かする。いかなる便りにか発心せし」など申せば、ある尼申すやう、「われはこの島の遊女の長者なり。あまた傾城を置きて、面々の顔ばせを営み、道行く人を頼みて、とどまるを喜び、

漕ぎ行くを嘆く。また知らざる人に向ひても、千秋万歳を契り、花の下露の情に酔ひを勧めなどして、五十に余り侍りしほどに、宿縁や催しけん、有為の眠り一度醒めて、二度故郷へ帰らず、この島に行きて、朝な朝な花を摘みにこの山に登る業をして、三世の仏に手向け奉る」など言ふも、うらやまし。これに一、二日とどまりて、また漕ぎ出でしかば、遊女ども名残惜しみて、「いつ程にか都へ漕ぎ帰るべき」など言へば、「いさや、これや限りの」などおぼえて、

いさやその幾夜明石の泊りとも

かねてはえこそ思ひ定めぬ

(二八六〜二八七頁)

遊女であった生活（部）から一転、出家・修行（部）の生活に入った遊女たちと出会う。遊女往生譚は和泉式部の伝承と重なり合い、説話の世界で語られて来た。ここでは往生譚に連なるものとして、出家した遊女たちが配されている。

ここに述べられる遊女の実態（部）は、『とはすがたり』前編に描かれる後宮の女としての二条の生活に重なる。自ら客を選べぬ遊女は支配と被支配の關係に生きている。二条の生きた古代天皇制の男女の構図もまた、明らかに上皇をめぐる支配被支配の關係であった。そのような現実から通れ

て、出家した状況も、遊女と二条に重なり合うのである。赤坂の宿の遊女とは対極的に、出家を遂げた遊女たちに悲惨な翳りはなく凜として明るい。

出家した遊女の記述を最後に遊女は二度と作品に登場しない。これは偶然ではなく意図的な構成であろうと思われる。赤坂の宿の遊女からたいが島の出家した遊女へという記述順序には、宮廷女房から旅の尼へという二条の人生の心的過程が深く投影されている。

## 五、新しい旅へ

### I 小町と西行―二つの典型

遊女に重なる小町の末路。ひとつ間違えば、流浪の女の身の果てには全く保証がなかった。小町への関心は、零落と流浪という二条の旅の現実の反映である。

（上略）父の生所を祈誓申したりし折、「今生の果報に替ゆる」と承りしかば、恨み申すにはなけれども、袖を<sup>①</sup>げんをも嘆くべからず。また、小野小町も衣通姫の流れはありしかども、「わればかりもの思ふ」とかや書き置きしなど思ひ続けても、先づ御社へ参りぬ。（二三三頁）

小町は女人壮衰記の流れの中で捉えられている。傍線部の

小町の裸形に近い風体はまさしく『玉造小町壯衰書』を引く。

小町の現実とは対極的に、女西行と称される二条であるが、後年の旅への伏線として、巻一に西行憧憬が叙述される。<sup>14)</sup>

(上略) 九つの年にや、西行が修行の記といふ絵を見しに、片方に深き山を描きて、前には河の流れを描きて、花の散りかかるに居て眺むるとて、

風吹けば花の白浪岩越えて

渡りわづらふ山川の水

と詠みたるを描きたるを見しより、うらやましく、難行苦行は叶はずとも、われも世を捨てて足にまかせて行きつつ、花の下露の情をも慕ひ、紅葉の秋の散る恨みをも述べて、かかる修行の記を書き記して、なからん後の形見にもせばや、  
(七三三頁)

九歳で西行絵巻を見てから、難行苦行は叶わぬまでも足に任せて風流の旅をし、それを書き残せたら、と羨ましく思ってきた——未だ十代の二条が、我が子である皇子を亡くした折の感慨である。傍線部の内容は後年実現されたのである。作品は次のように終るのである。

(上略) 修行の心ざしも、西行が修行の式、羨しくおほえてこそ思ひ立ちしかば、その思ひを空しくなさじばかりに、かやうのいたづら事を続け置き侍るこそ。後の形

見とまでは、おぼえ侍らぬ。

(三三〇頁)

## Ⅱ 一人旅の可能性

伝承の小町も絵に描かれた西行も一人旅であった。西行は理想の旅を体現した男性である。一方、小町という女性の一人旅は、制度から逸脱した零落の流浪であり、最期は行き倒れる運命であった。制度的な女性の旅には、従者がいた。平安鎌倉期の女性に最も一般的な移動であった物語はもちろん、『更級日記』の旅にも、『十六夜日記』の旅にも従者がいる。

女の一人旅は現実に可能であったのだろうか。『信貴山縁起絵巻』の「尼公の巻」に描かれる尼は老齢で一人旅である。『うたたね』の出奔にも、『とはすがたり』の旅にも同行者はいない。ただし、虚構性の顕著な『うたたね』から当時の現実を類推するのは無理があるうし、又『とはすがたり』の場合、従者はいても書かないということが当然あり得る。

網野善彦<sup>15)</sup>は、中世には一人旅の女性は珍しくなく、性が解放されていたと論じる。追い剥ぎや強盗に会う可能性は男女とも同様だが、性暴力を受ける受動性は女性独特のものである。性の解放ということは、一人旅をする女には遊女的な側面がついてまわるといふことに他なるまい。

網野に対しては、反論も出されている。「旅人が集団を組

むことは、本拠があり、目的があり、コースがあるとすると旅の合法化を主張することになった<sup>⑭</sup>とする水原一の説を採用して、細川涼一<sup>⑮</sup>は女性芸能者、白拍子が二人連れであることに注目している。『とはすがたり』の赤坂の宿の遊女が姉妹であったことが想起されよう。そして細川は、小町のような一人旅について、「目的もなく一人さまよう孤独な一人旅は、中世においては社会体制から脱落・排除された非人身分に通じるものとされたのである」と指摘し、能の物狂物に登場する狂乱の女たちが一人旅であることにも言及する。確かに創作性の強い『うたたね』の「物狂ほしき」出奔という劇的要素は、後代の謡曲における狂乱の道行を彷彿させる<sup>⑯</sup>。

『伊勢物語』のさすらいの旅人・昔男にさえ二、三人の従者はいるのだが、『とはすがたり』の旅に、従者の影はまったくない。これは、あるいは作品化の過程の造型かも知れぬが、断定は出来ない。少なくとも『とはすがたり』は、一人旅であることを強調した作品であると言い得よう。一人旅なればこそ、危険も伴う反面、冒険、発見の要素が濃厚になる。

### Ⅲ 一人旅の自由

二条は和歌連歌の「遊び」の席で持て囃され、長時間の会、長期間の滞在を楽しんでいる。

・心の外にのみおぼえて過ぎ行くに、飯沼新左衛門は、歌をも詠み、好き者という名ありし故からにや、若林二郎左衛門といふ者を使にて、たびたび呼びて、続歌などすべき由、ねんごろに申ししかば、まかりたりしかば、思ひしよりも情あるさまにて、たびたび寄り合ひて、連歌・歌など詠みて遊び侍りしほどに、 (二四五頁)

・(上略) 高岡の石見入道といふ者あり。いと情ある者にて歌常に詠み、管絃などして遊ぶとて、かたへなる修行者・尼に誘はれてまかりたりしかば、まことに故ある住まひ、辺土分際には過ぎたり。彼といひ、是といひて、慰む便りもあれば、秋まではとどまりぬ。 (二四八頁)

このように人が大勢集まる「遊び」の場は、出会いの場である。二条は、宮中では味わい得なかつた楽しさを満喫している。ここには「色好み」的素地も充分ある。そもそも歌詠みであることは「色好み」の必要条件であった。旅先の「遊び」の場に於ける女の立場は、多分に遊女的性格を帯びる。「好色の家に名を残す危険性は、在俗の女なら充分あり得た。尼であることは、そのような危険から彼女を守った。とは言え、二条が男女人間の噂の種と全く無縁というわけでもない。

とかく過ぐるほどに、九月の十日余りの程に、都へ帰らんとするほどに、さきに慣れたる人々、面々に名残

惜しみなどせし中に、暁とての暮れ方、飯沼左衛門尉、さまさまの物ども用意して、今一度続歌すべしとて来たり。情もなほざりならずおぼえしかば、夜もすがら歌詠みなどするに、「涙川と申す河はいづくに侍るぞ」といふことを、さきの度尋ね申ししかども、知らぬ由申して侍りしを、夜もすがら遊びて、「明けばまことに発ち給ふやは」と言へば、「止まるべき道ならず」と言ひしかば、帰るとて、盃据ゑたる折敷に書きつけて行く。

わが袖にありけるものを涙川

しばし止れと言はぬ契りに

返しつかはしやするなど思ふほどに、また立ち帰り、旅の衣など賜はせて、

着てだにも身をば放つな旅衣

さこそよそなる契りなりとも

鎌倉の程は、常にかやうに寄り合ふとて、「あやしく。いかなる契りなどぞ」と申す人もあるなど聞きしも、取り添へ思ひ出でられて、返しに、

乾ざざりしその濡衣も今はいとど

恋ひん涙に朽ちぬべきかな

都へ急ぐとしはなけれども、さてしもとどまるべきならねば、朝日と共に明け過ぎてこそ発ち侍りしか。

(二五二―二五三頁)

旅先の別れを惜しみ、衣をめぐって疑われる仲。そう深刻ではないが、二条が女性として充分に魅力的であるが故の「濡れ衣」であろう。才色兼備な尼に詠みかける男の歌に恋心を匂わせるものがあるうとも、不思議はない。

ともあれ、二条は、人々に歓迎されつつ旅をしている。

誰が許とも知らで過ぎ行くに、棟門の故々しきが見ゆれば、堂などにやと思ひて立ち入りたるに、さにてはなくて、由あるひとの住まひと見ゆ。庭に菊の籬、故あるさまして、移ろひたる匂ひも九重に変わる色ありとも見えぬに、若き男一、二人出で来て、「いづくより通る人ぞ」など言ふに、「都の方より」と言へば、「かたはらいたき菊の籬も目恥かしく」など言ふも由ありて、祐家が子、権頭祐永などぞ、この男は言ふなる。祐敏美濃権守、兄弟なり。

九重の外に移ろふ身にしあれば

都はよそに菊の白露

と、札に書きて、菊につけて出でぬるを、見つけにけるにや、人を走らかしてやうやうに呼び返して、さまさまもてなしなどして、「しばし休みてこそ」など言へば、例の、これにもまたとどまりぬ。(二五六―二五七頁)まさしく、都からの雅な尼として、九重にもてなされる場面である。「菊の籬」に目をとめたことを機縁に祐家のもとに

思いがけず滞在するようになったいきさつである。

暁、発たんとする所へ、内宮の一櫛宜尚良が許より、「この程の名残、思ひ出でられ侍る。九月の御齋会に必ず参れ」など言ひたりしも情ありしかば、

行く末も久しかるべき君が代に

また帰り来ん九月の頃

(二七二頁)

和歌で再訪を約束している場面であり、都人である歌詠みの尼と土地の人の交流である。

#### IV 一人旅の達成

子 敏 関 今  
二条は人買いの手に落ち、危うく逃れるという難(和知の受難)にあっている。危険も誘惑も多いのが女の旅の現実であった。

石清水で再会の後、伏見で再び会談の機会を得た折、後深草院が執拗に二条の男性関係を探ったのは、女の一人旅はきわめて異例なことだからに他ならないであろう。

さて、この世ながらの程、かやうの月影は、おのづからの便りには必ずと思ふに、遙かに龍華の暁と頼むるは、いかなる心の中の誓ひぞ。また、東・唐土まで尋ね行くも、男は常のならひなり、女は障り多くて、さやうの修行叶はずとこそ聞け。いかなる者に契りを結びて、憂き世を厭ふ友としけるぞ。一人尋ねては、さりともしかが

あらん。

(二七六頁)

女がひとり旅をすることに對する認識を看過できない。男が遠い修行の旅に出るのは珍しくはないが、女は障害が多く、そのようなことは不可能と聞いている。一体どのような者と契りを結んで困難な旅の伴侶としたのか。女一人ではないかにも無理であろう。旅の途中で知り合った人も、仮の仲ではあるまい、信頼し、将来を約束していた男もあったであろう。連れ歩く人がなかったわけではあるまい。二条の男性関係に疑いを抱く院の問いかけから、当時の女にとって、旅がいかなるものであったかが、浮かび上がってこよう。

さらに、院は具体的に畳み掛ける。

涙川袖にありと知り、菊の籬を三笠の山に尋ね、九月の空を御裳濯川に頼めけるも、皆これ、ただかりそめの言の葉にはあらじ。深く頼め、久しく契るよすがありけん。そのほか、またかやうの所々具しありく人も、なきにしもあらじ。

(二七六頁)

傍線部は、Ⅲで触れた、濡れ衣の歌の贈答、祐家宅滞在、尚良と九月再会を約束した件をさす。後深草院が疑いを抱き、二条に尋ねているのは、いずれも、いわゆる「遊び」の場になり得る土地の人のもとの逗留、人間関係である。

二条の答は次のようなものである。

九重の霞の中を出でて、八重立つ霧に踏み迷ひしよりこ

のかた、三界無安猶如火宅、一夜とどまるべき身にしあらねども、欲知過去因拙ければ、かかる憂き身を思ひ知る。一度絶えにし契り、二度結ぶべきにあらず。石清水の流れより出づといへども、今生の果報頼む所なしといひながら、東へ下りはじめにも、先づ社壇を拜し奉りしは、八幡大菩薩のみなり。近くは心の中の所願を思ひ、遠くは滅罪生善を祈誓す。正直の頂をば照らし給ふ御誓ひ、これあらたなり。／東は武蔵野国隅田川を限りに尋ね見しかども、一夜の契りをも結びたること侍らば、本地弥陀三尊の本願に洩れて、永く無間の底に沈み侍るべし。御裳濯川の清き流れを尋ね見て、もしまた心をとどむる契りあらば、伝へ聞く胎金両部の教主も、その罰あらたに侍らん。三笠の山の秋の菊、思ひをのぶる便りなり。もしまた、奈良坂より南に、契りを結び、頼みたる人ありて、春日社へも参り出でば、四所大明神の擁護に洩れて、空しく三途の八難苦を受けん。(二七七―二七八頁)

具体的に尋ねられた件についても、その他の可能性についても、神仏にかけて、疑われるようなことはない。この身は潔白であると二条は言い切る。ここまで弁解する必要が当時の女の旅、とりわけ、二条のような流浪漂泊の身にはあったということであろう。

さらに、〈色好み〉的側面をもつ流浪の現実が語られる。

(上略) あちこちさまよひ侍れば、或る時は僧坊にとどまり、或る時は男の中にまじはる。三十一文字の言の葉をのべ、情を慕ふ所には、あまたの夜を重ね、日教を重ねて侍れば、あやしみ申す人、都にも田舎にもその数侍りしかども、修行者と言ひ、梵論梵論など申す風情の者に行きあひなどして、心の外なる契りを結ぶためしも侍るとかや聞けども、さるべき契りもなきにや、いたづらに独り片敷き侍るなり。都の中にもかかる契りも侍らば、重ねる袖も二つにならば、寒ゆる霜夜の山風も防ぎ侍るべきに、それもまたさやうの友も侍らねば、侍つらんと思ふ人しなきにつけては、花の下にいたづらに日を暮し、紅葉の秋は、野もせの虫の霜に枯れ行く声をわが身の上と悲しみつつ、空しき野辺に草を枕として明かす夜な夜なあり (二七九頁)

流浪の要素の強い現実で、人の世話になって二条は旅をしてきた。男たちの中に身を置いてもきた。「遊び」の場に逗留すれば、噂がたちもした。縁もなかつたとみえるが、しかし、男と契りを結ぶことだけは断じてなかつた、この身は潔い。御所を追放されてから、ひとりであることを基盤にして、ここまで生き抜いた我が身の真実を自信と誇りをもって堂々と後深草院に弁明したのである。

## 六、むすび

都が拠点たり得なければ、必然的に旅は流浪漂泊の要素をもち始める。元来、目的とコースのある制度的で正統な旅は、あてどなくさすらう流浪とは対極的であった。紀行文を成すのは、制度的旅人であり、流浪の主体は自らの流浪を書き残すことはなかったのである。従者も連れぬ、さすらいの要素が、鎌倉期に至って女の旅の表現に見え始めるのは、きわめて興味深い現象である。寺社を巡り、参籠し、土地の人々の家に身を寄せて旅を続け、都と地方を往復した女性・二条の出現は驚くべきことであろう。

子 関 敏 今  
行動半径の広さ、旅にかけた時間、旅の多様さ。その昔、西行に憧れた時、女の身でここまで実現できるとは思いもしなかったであろう。流浪の要素と自由の謳歌こそが、二条の旅の醍醐味である。それまでの女の旅には見出せぬ新しい旅のあり方である。尼である二条に、地方の人々は一目置いて接している。二条は都から来た雅な歌詠みの尼、丁重にもてなすべき客人として危険を免れ、「遊び」の場にも出入りし、宮中では味わうことの出来ぬ人間同士の触れ合いを楽しみ、自由を発見したのである。

『とはすがたり』の旅の表現は、歌枕訪問・都回帰という紀行の類型表現を基本的には骨子にしながら、決してそれだ

けに終わっていない。しばしば予定は変更され、思わぬ経験が待っている。冒険的要素が加わる旅の面白さである。次に何が起るのかという期待で読者を惹きつけるに十分な魅力がある。

『とはすがたり』は、流浪性の濃厚な旅の内実―その危険性と自在さが、まさに行為の主体である女性の眼で描かれているところが新しい。制度からの逸脱は、二条を破滅に追いやりたりはしなかった。前例のない独自のプロセスで、見事に自己実現を成し遂げ、小町の末路の呪縛から解放されてしまふのである。冒険的で意志的で自由な二条の旅は、とりもなおさず、家なき女の人生の達成である。

(教授 日本文学)

## 注

① 本文の引用は新潮日本古典集成『とはすがたり』(福田秀一校注)に拠る。

② 今関敏子『阿仏尼おける旅の造型―『うたたね』の流浪―』日本文学二〇〇二・六

③ 今関敏子『色好み』の系譜―女たちのゆくえ』世界思想社一九九六

同『色好み』の流浪―小野小町の運命』文学第三卷第一号二〇〇二・一

④ 引用は群書類従本に拠る。適宜漢字を宛て、句読点を付す。



- ④ ②の拙著。
- ⑤ ①に同じ。
- ⑥ 心さし深からむ男を置きて、見る目の前に、つらきことありとも、人の心を見知らぬやうに、逃げ隠れて人をまどはし、心を見むとするほどに、長き世のもの思ひになる、いとあぢきなきことなり。心深しや、などほめたてられて、あはれ進みぬれば、やがて尼になりぬかし。(新潮日本古典集成『源氏物語』一―五七頁)
- ⑦ 『蜻蛉日記』『建礼門院右京大夫集』にも例がみられる。
- ⑧ ②の拙著。
- ⑨ 和歌・紀行ともに、行路は都を離れることを悲しみ、帰路は都に近づくことを喜ぶという表現類型がある。
- ⑩ 今関敏子『信生法師集新訳』風間書房、〇〇二年
- ⑪ 今関敏子『『史級日記』の構成―宮頭部と終結部をめぐって』日記文学研究誌第四号、〇〇二―二―
- ⑫ たとえば、小川寿子(「後深草院二条と遊女発心譚―その今様環境と興味等に触れて―」『梁塵 日本歌壇とその周辺』中世歌謡研究会編 桜楓社 一九八七)に遊女と今様からの興味深い考察がある。また、加賀元子(『『とはすがたり』における「遊女」―その意義―』武庫川国文第四一号 一九九四)は作品に書かれているのは作者の代弁者としての遊女であるとし、そこに新しさを見出している。
- ⑬ 『無名草子』『古本説話集』に和泉式部は歌の徳ゆえに往生したという記述がある。伝承の過程で、(色好み)の女、和泉の往生は、罪深い遊女の往生に結び付けられた。
- ⑭ 寺尾美子は、『『とはすがたり』の旅における小町幻想とその現実』(『日記文学研究第一集』日記文学懇話会編 新典社 一九九三)で「小町は、喪失してしまった、そしてそれを認めざるを得なかつた自己の象徴。西行は、納得し、肯定する自己の確認」と述べている。
- ⑮ 網野善彦『中世の非人と遊女』明石書店、九九四
- ⑯ 水原一『平家物語の形成』加藤中道館、九七。
- ⑰ 細川涼一「中世の旅をする女性―小宗教・芸能・交易―」『女と男の時空』藤原書店、九九六
- ⑱ ①に同じ。